

主体的・対話的で深い学びを目指した社会科授業の実践
～歴史にどっぷり！はまってしまう児童の育成を目指して～

鹿屋市立田崎小学校 教諭 小田原 美香

目次

1	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	研究主題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
3	研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・	1
4	目指す児童の姿・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
5	研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
6	研究の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
(1)	主体的・対話的で深い学びを実現するために「歴史にどっぷり！はまってしまう」歴史との出会い	
ア	「あなたは生き残れるか？！サバイバルゲーム（縄文編）」	
	「日本の歴史 歴史学習を始めよう」の授業実践	
イ	「米作りが広がったら何が変わるの？」	
	「1 縄文のむらから古墳のくにへ むらからくにへ」の授業実践	
(2)	深い学びへ「三角ロジック」の実践	
ア	「2 天皇中心の国づくり」「大仏をつくる」における実践	
イ	「10 世界に歩み出した日本」「条約改正を目指して」「発展していく日本」における実践	
(3)	単元内自由進度学習を取り入れた実践	
ア	「10 世界に歩み出した日本」「世界へ進出する日本」における実践	
7	成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
8	おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9

[引用・参考文献・参考]

・『小学校 学習指導要領』	文部科学省	平成 29 年
・『小学校 学習指導要領解説 社会編』	文部科学省	平成 29 年
・『新編 新しい教科書 6 歴史編』	東京書籍	令和 5 年
・『子供たちが主体的に学べる多様な学びの実現に向けた検討タスクフォース 論点整理』		
https://www.mext.go.jp/a_menu/other/mext_00009.html	文部科学省	令和 5 年
・『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』	中央教育審議会	令和 3 年
・『情報教育を楽しむ会』（楽情研）肝属地区	情報教育情報交換会	令和 6 年
・『シンキングツールで授業を変える！わくわくパフォーマンス課題づくり』	明治図書出版	令和 4 年
・教職員歴史講座配布資料		令和 6 年
・維新ふるさと館所蔵資料，英国生留学館所蔵資料		令和 5 年
・『わくわくパフォーマンス課題づくり』 立石俊夫	明治図書出版	令和 4 年
・ロイロノート school https://n.loilo.tv/ja/		
・GoogleEarth 「東大寺」		

1 はじめに

GIGAスクール構想をきっかけに、一人一台タブレット端末が配備され4年目を迎えた。私自身5年続けて6年生と学習を進めていることで、6年生の学習内容や学習指導要領に沿った指導法の研究及び、子供たちにどのような力を身に付けさせたいかを考えながら授業づくりを実践することができている。

また、社会科の学習において、タブレット機器を効果的に取り入れることで主体的・対話的で深い学びが実現でき、クラスの児童全員にとってより実りのある授業になるのではないかと考えるようになった。また、教育実習生が配属されたこともあり、更に自身の授業改善への意識が高まっていた。

そこで、今年度は主体的・対話的で深い学びを目指した社会科授業の実践に取り組むことにした。

2 研究主題

主体的・対話的で深い学びを目指した社会科授業の実践
～歴史にどっぷり！はまってしまう児童の育成を目指して～

3 研究主題設定の理由

(1) 社会科の目標（小学校学習指導要領解説【社会編】より一部抜粋）

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追求したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(3) 社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。

(2) 児童の実態・願い

本学級は、36人の学級である。令和6年9月に実施した実態調査（33人実施）では、社会科のイメージを問うと、「好き」「楽しい」と答えた児童が30人、「苦手」と答えた児童が3人という結果になった。苦手と答えた児童に理由を尋ねると「覚えることが多い」「漢字が難しい」という回答であった。また、学級の実態として、誰とでも課題解決に向けて熱心に学習に取り組もうとする意欲的な姿が見られる。

一方で、深い学びにつながる課題への取組に苦手意識が強く見られる。こうした課題を解決するために、社会科の学習にのめり込んでしまうような指導方法の工夫が必要であると考えた。

(3) 単元内自由進度学習を取り入れる効果

本学級の実態より、意欲的に学習に取り組むことが出来ているが、課題解決に要する時間に大きな差があることが分かった。これまで協働的な学習を進めて来たが、「教えるだけ」「聞くだけ」の一方方向になってしまっていた。「子供たちが主体的に学べる多様な学びの実現に向けた検討タスクフォース(文部科学省 令和5年9月5日)」の中に「多様な子供たちを受け止める柔軟で包摂的な教育課程の編成」に関する記述にあるように全員で同じように同じ課題を進めるより、自分に合った方法で課題解決に向けて取り組むことで、学習効果を高められるのではないかと考えた。そこで、主体的に学習に取り組もうとする姿を育成するために、単元内自由進度学習を取り入れることとした。

4 目指す児童の姿

研究主題設定の理由を受けて、以下のような児童の姿を目指したい。

- ・主体的・対話的で深い学びを実現しようとする児童
- ・社会的事象の見方・考え方を働かせ、学習の問題を追究・解決しようとする児童
- ・多角的な思考や理解を通して、我が国の歴史や伝統を大切にしようとする児童

5 研究内容

実態把握をもとに、以下の実践を行った。

- (1) 主体的・対話的で深い学びを実現するために「歴史にどっぷり！はまってしまう」歴史との出会い
ア 「歴史学習を始めよう～知っていることを話し合おう～」 「1 縄文のむらから古墳のくにへ」
における実践
イ 「米作りが広がったら何が変わるの？」 「1 縄文のむらから古墳のくにへ むらからくに
へ」の授業実践
- (2) 深い学びへ「三角ロジック」の実践
ア 「2 天皇中心の国づくり」「大仏をつくる」における実践
イ 「10 世界に歩み出した日本」「条約改正を目指して」「発展していく日本」における実践
- (3) 単元内自由進度学習を取り入れた実践
ア 「10 世界に歩み出した日本」「世界へ進出する日本」における実践

6 研究の実際

- (1) 主体的・対話的で深い学びを実現するために「歴史にどっぷり！はまってしまう」歴史との出会い
「私たちの生活と政治」の学習で、子供たちは政治が自分たちの生活と関わりが深いことに気付
き始めたことが分かった。そこで、子供たちの「現在の憲法がどのようにして作られたのか」とい
う疑問を解決すべく、日本の歴史を知る必要があると公民的分野と歴史的分野の学習のつながり
をつくる必要があると考えた。

今回は、更に Canva の動画機能を授業の導入で活用することで、より子供たちの興味関心を引き
出し社会的な見方・考え方を働かせたいと考え、Yチャートに「衣・食・住」の3つの視点に沿っ
て考えを整理させることにした。

ア 「あなたは生き残れるか？！サバイバルゲーム（縄文編）」

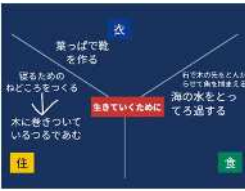
「日本の歴史 歴史学習を始めよう」の授業実践

- (ア) ねらい

縄文時代の暮らしを予想し、主体的・対話的に歴史の学習へ取り組もうとする意欲を高める。

- (イ) 授業の実際

自分事として生き抜く方法を考えさせるために、サバイバルゲーム仕立て (Canva で作成) の
映像を提示した。無人島生活で生き抜くためにどうすればよいか、「衣・食・住」の3つの視点
に沿って予想させることで、縄文時代について知る学習と関連付けながら以下の方法で授業を
展開した。

過程	主な学習活動	指導上の留意点
つかむ・見通す	 【導入提示資料】	1 教師の物語を聞き、学習への意欲を高める。 2 無人島に不時着し、脱出不可能なため、生活しなければならぬことを考慮して、何をすればよいか「衣・食・住」の3観点に沿って予想する。 ○ 児童の興味関心を高めさせるために、歴史の学習とかけ離れた動画を提示する。 ○ 脱出することに固執させないために、「脱出不可能」「必要な道具も洋服も全て消失してしまったこと」の条件をそろえる。 ○ 縄文時代の生活と関連させるために、「衣・食・住」の3つの視点から考えさせる。
	 【児童作成 Y チャート】	3 互いの生き延びる方法を見比べる。 4 共通点を見付け、どうすれば生き残れるか学級としての答えを出す。 ○ 自分事として考えさせるために、思いつくことは全て入力させる。 ○ 縄文時代の暮らしに迫らせるために、「寝床を作る」から「木を巻き付けて」と具体的にイメージを広げている児童の考えを全体で共有する。
広げる	 【縄文時代紹介資料】	5 共通点と同じようなことをしていたのが、縄文時代の人々の生活であることを知る。 6 今後知りたいことを書き出し、学習計画を立てる。 ○ 先人とのつながりを意識させるために、「飲み水の確保」「狩り」「採集」「釣り」「食器づくり」などの共通点に着目させる。 ○ 深い学びにつなげさせるために、共通点から更に知りたいこと、気になったことを書き出させ、学習計画を立てさせる。

(ウ) 考察と今後の課題

例年同様の方法で導入を行っているが、今年度はより具体的に条件を提示したことで成果が表れた。児童が自分の考えをより明確に記述できるようになり、無人島から脱出することに固執する児童の数が減った。そして、「建物を建てるために、何が必要か」「どうすればよいか」等、より自分事として考えられる児童が増えた。

先人とのつながりを意識させることに加え、当時の生活の姿を想像しながら縄文時代の学習をスタートすることができた。学習を通して分かったことを Y チャートに書き足したり、疑問に思ったことを、Y チャートにまとめながら質問したりするなど、意欲的に学習に取り組む児童が増えた。そのため、学習に取り組む意欲がこれまで以上に高めることができたと考えた。

授業の後、「歴史が面白い」「先生縄文時代の次は弥生時代ですね」と次々に歴史学習を前向きにとらえ、次時の学習を楽しみにする児童がいた。今後は、この意欲を保ちつつ、深い学びの学習につながる更なる工夫が必要と感じた。

歴史の学習に意欲的に取り組もうとする姿が明確になったところで次の実践を行った。

イ 「米作りが広がったら何が変わるの？」

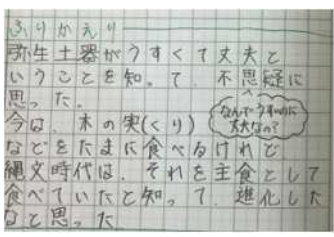
「1 縄文のむらから古墳のくにへ むらからくにへ」の授業実践

(7) ねらい

平和な縄文時代の様子と弥生時代の様子を比較し、歴史的事実を基に人々の暮らしがどのように変化したのか理解する。

(4) 授業の実践

平和で長く続いた縄文時代がなぜ終わってしまったのか、その理由に迫らせるために、縄文時代と弥生時代の比較をさせた。以下の方法で授業を展開した。

過程	主な学習活動		指導上の留意点
つかむ・見通す	教科書（東京書籍 新編 新しい教科書 6 歴史編）P.12 挿絵 ①縄文時代のくらし（想像図） 教科書（東京書籍 新編 新しい教科書 6 歴史編）P.14 挿絵 ②弥生時代のくらし（想像図）	1 縄文時代が平和で、長く続いたことを確かめる。 2 弥生時代が変わったことを知る。 3 二つの時代の図を送付し、違いを見つけ印を付ける。 （児童つぶやき） ・建物の数が増えている。 ・人が増えているぞ。 ・緑色の部分が増えているな。 ・どうして囲いができたのだろう。 3 本時のめあてを立てる。 ④ 弥生時代になって世の中の様子はどのように変わったのだろう。	○ 平和で長く続いたことを確かめさせるために、縄文時代について分かったことを、資料を示しながら発表させる。 ○ 縄文時代と比較させる視点を明確にするために、縄文時代と違うところに印をつけさせる。 ○ 比較する視点や資料を見る視点を全員がもてるようにするために、気付いたことを積極的に発言させる。 ○ 児童の意欲を高めるために、グループ内で見せ合いながら違いを見付ける。
調べる・深める	 【縄文弥生比較キャンディーチャート】	4 キャンディーチャートにまとめる。 5 自分の調べた時代を発表する。 6 二つの時代を比べて違うところ見付ける。 7 全体で分かったことを共有する。	○ 二つの時代の違いに気付かせるために、縄文時代と弥生時代をグループ内で分けて調べさせる。 ○ それぞれの時代について詳しく調べさせるために、デジタル教科書の付属資料も閲覧させる。
まとめる	 【児童の振り返り】	8 まとめる。 ④ 縄文時代は自然とともに平和に生きていたが、弥生時代は米作りを中心に争いが増えた。 9 振り返る。	○ 時代の特徴を捉えさせるために、それぞれの時代ごとに見つけた違いをまとめさせる。 ○ 時代が変わるときにはきっかけがあることを確かめさせることで、今後の時代変化を予想させる。

(ウ) 成果と課題

「縄文時代と弥生時代は変わらないよね」と発問したことで、「いやいや違う」「だって…」と児童の中から自然とつぶやきがあふれ、意欲が向上した中で、本時のめあてを立てることができた。また、デジタル教科書の拡大機能や解説機能を活用することで、より詳しく一つ一つの資料を見ることができた。

このことにより、縄文時代の様子と弥生時代の様子の違いを、具体的に児童の言葉と教科書本文の言葉を使って表現することができた。また、共有ノートにまとめた内容を全体で共有しながらノートに整理することで、知識の定着を図ることもできた。

今回の学習を通して、児童がより主体的・対話的に学びに向かうために教師の発問による手立てをとることができたことが要因である。そこで、歴史的事実から一歩進んだ、深い学びにつなげるには、どうすれば良いかという新たな課題を解決すべく、深い学びへ「三角ロジック」の実践を行うことにした。

(2) 深い学びへ「三角ロジック」の実践

ア 「2 天皇中心の国づくり」「大仏をつくる」における実践

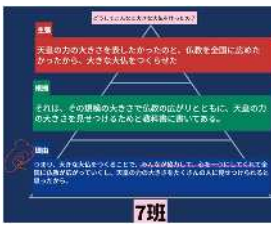
(ア) ねらい

飛鳥・奈良時代には、仏教の力で国を治めようとしたことを理解し、なぜ大きな大仏づくりにこだわったのか、歴史的事実に基づいて予想できる。

(イ) 授業の実践

歴史的事実を把握し、分かったことをもとに更に深い学びにつなげる方法はないか検討を重ねていた。すると、「2 天皇中心の国づくり」「大仏をつくる」の学習において、教科書本文の文章量、資料の内容を含めて資料を関連付けて読み取ったり、読み取った情報から考えたことを議論したりするなどの「深める」が取り組みやすいことに気付き、以下の実践を行うことにした。

過程	主な学習活動	指導上の留意点
つかむ	 【GoogleEarthより東大寺内部画像】 1 聖武天皇が、仏教の力で国を治めようとしていたことを確かめる。 2 大仏づくりをさせたことを知る。 (児童つぶやき) ・大仏を作ったらどうなるの？ ・何かよいことがあるかな？	○ 時代が動き出したことを認識させるために、たくさんの重要語句が登場するようになったことを振り返らせる。 ○ 聖武天皇が社会の不安をしずめるために、東大寺を建てさせたことを確かめる。
つかむ・見通す	 【大仏づくりの様子】 3 本時のめあてを立てる。 ④ 聖武天皇は、大仏づくりをどのように進めたのだろう。 4 GoogleEarth を使い、東大寺を検索する。 5 東大寺内部に入り、どのような大きさだったかイメージを広げる。	○ GoogleEarth を使い、東大寺の場所や中の様子を見させることで、大きな大仏を作らせたことを認知させる。 ○ 機械を使わず、人力だけで作ったことに着目させることで、本時のめあてを立てさせる。

調べる・まとめる	 【大仏づくりの様子】	6 教科書を読み、ベン図にまとめる。(グループ) 7 全体で共有し、事実を整理する。 ・天皇の命令で作りはじめた。(ノート) ・全国から集まった人々の力で完成 ・渡来人、行基の活躍 ・大きな大仏	○ 教科書本文から分かったことを全体で共有することで、知識の定着を図る。 ○ 資料を見させるために、どこから見付けたのか資料を示しながら説明させる。
深める	 【なぜ大きな大仏にこだわったのか(三角ロジック)】	8 聖武天皇は、どうしてここまで大きな大仏をつくらせたのか考える。(三角ロジック) 9 まとめる。 ④ たくさんの人々の協力を得て、人の力と知識を使って大仏づくりを進めた。	○ 歴史的事実から想像したこと、当時の人々の思いを巡らせるために、三角ロジックを用いてまとめさせる。 ○ 力の大きさを示すだけでなく、人々の心をついにし、国を治めようとしたことを全体で共通理解させる。

(ウ) 成果と課題

歴史的事実を確認する際、「どうして」「どこから分かったの」「ここからどうなると思う」と深める発問を意図的に行ってきた。しかし、児童の実態から分かっていない児童にとっては、取り残されている時間だったことに気付いた。

そこで事実確認の後、深める場面の時間を別に設定してじっくり考え、話し合わせることにした。

三角ロジックを活用した実践により、これまで取り残されていた児童も一緒に学ぼうとする姿が見られるようになった。特に理由の部分をつくり児童間で話し合わせたことで何度も教科書を読み直したり、これまでのノートを見返したりする姿を見ることができた。三角ロジックを活用することで、より深い学びにつながるヒントを見付けることができた。児童に尋ねてみたところ、「じっくり教科書や資料を見られるようになった」「ノートにまとめることに集中できるから短時間でできるようになった」と、どの児童にとっても良い効果が得られることが分かった。

そこで、更なる主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、次の実践を行うことにした。

イ 「10 世界に歩み出した日本」「条約改正を目指して」「発展していく日本」における実践

(ア) ねらい

明治維新により、日本はどのように国づくりを進め、世界に歩み出していったのか歴史的事実を把握するとともに、今後の日本の姿を予想する。

(イ) 授業の実践

「条約改正を目指して(P. 117)」「発展していく日本(P. 118)」は、それぞれ1時間ずつ実施する内容である。単元の構成上、「条約改正を 目指して(P. 117)」で取り扱われているノルマントン号事件の全容について重点をおき、調べさせたいと考えた。同時に、「発展していく日本(P. 118)」から必要な情報を取り出すことで、学習計画を立てたり、「児童のもっと知りたい」という意欲を高めさせたりできるのではないかと考え、次の実践を行うことにした。

過程	主な学習活動	指導上の留意点
つかむ・見通す	教科書（東京書籍 新編 新しい教科書 6 歴史編）P.116 ①ノルマントン号事件を風刺したまんが 1 ノルマントン号事件の風刺画を見て、気付いたことを自由に発言する。 （児童つぶやき） ・小さな船だな。 ・船に乗っている人は偉そう。 ・海に浮いている人は誰だろう。 2 ノルマントン号事件という事件の風刺画であることを知る。 3 本時のめあてを立てる。 ② ノルマントン号事件とは、どのような事件で日本にどのような影響を与えたのだろう。	○ 資料の内容や本文に着目させるために、ノルマントン号事件の風刺画を提示する。 ○ ノルマントン号事件のどこが問題なのか、ノルマントン号事件とはどのような事件なのか、主体的に考えさせるために、気付いたことを自由に発問させる。 ○ 児童の意欲を高めさせるために、児童の自由な発言を基にして本時のめあてを立てさせる。
調べる・まとめる	【ノルマントン号事件、何が問題？（ピラミッドチャート）】 4 教科書を読み、ピラミッドチャートにまとめる。（個人） 5 全体で共有し、事実を整理する。（ノート） ・和歌山県沖で起きた事件（日本） ・イギリスの貨物船が沈没 ・日本人乗客が全員亡くなってしまった。 ・西洋人は全員無事。 ・船長は軽い罰を受けただけ。	○ 個人で課題に取り組ませる。 ○ ノルマントン号事件の問題点を捉えさせることで、日本が不利な状況に立たされていたこと、不平等条約によって日本の法律で裁くことができないことを確かめさせる。 ○ 歴史的事実を抑えることで、条約改正の必要感をもたせる。
広げる	【今後の日本の姿を予想する（ピラミッドチャート）】 6 P.117の「条約改正を目指したが、なかなか交渉は進まなかった」P.118を読み、条約改正のために何をすべきか話し合う。（グループ） 7 まとめる。 ③ 日本が不平等条約を改正しよう動き出すきっかけになった事件。ここからの日本は世界に負けない強い国づくりを目指すきっかけになった。	○ 教科書 P.118 を提示することで、日本が変わっていくことを捉えさせる。 ○ 「産業の発達」「近代化」「機械化」「条約改正」の中から主張を選ばせることで、根拠や理由をグループで話し合わせる。

(イ) 成果と課題

これまで調べる学習の場面では、グループでシンキングツールにまとめるだけの活動をさせてきた。これまで教科書から何をまとめればよいか分からず、友達のまとめる姿を見ている児童がいた。見ていることを称賛し友達が入力したところに線を引くようにさせたところ友達のまとめる姿を見ながら、どこをまとめればよいかポイントが分かってきていたように感じた。

本実践により、全員が事件の概要を短時間で理科し、まとめることができた。また、事件の内容について「何が問題なの？」「よくある事件じゃないの？」と教師が発問することで児童は主体的に教科書を読んだり、資料を見直したりする姿も見ることができた。全員の学習レディネスが整った状態で、単元内自由進度学習を取り入れた実践を行うことにした。

(3) 単元内自由進度学習を取り入れた実践

ア 「10 世界に歩み出した日本」「世界へ進出する日本」における実践

(ア) ねらい

日露戦争で勝利した日本が、世界へ進出する過程を捉えるとともに、活躍した当時の人々の偉業について知り、政治や社会の変化と総合しながら多面的・多角的に歴史的事実を捉える。

(イ) 実際の取組

日露戦争以降の日本は、急速に発展し、これまで認められなかった世界の国々から認められるようになる。そこで、全6時間単元の3時間はクラス全体で一斉学習を行い、まとめを含む後半3時間は自由進度学習を取り入れることにした。社会科学学習の中で初めての取組であったため、3つのコースに分けて進めることにした。

【表1 コース名・まとめ方】

コース名	ゆっくり一人コース	グループの友達とコース	先生と一緒にコース
共通実践内容	① 国際的地位の向上により、日本はどのように発展していったのかまとめる。 ② 教科書は必ず読み、大切なところに線を引く。 ③ 毎時間提出箱に取り組んだ課題を提出する。 ④ 自分が分かりやすい方法でまとめる。 ⑤ 教師作成のミニテストに合格する。		
人数	4人	15人	9人
まとめ方	・ノート(3人) ・タブレット(1人)	・ノート(6人) ・タブレット(9人)	・ノート(9人)

ゆっくり一人コースでは、学習意欲が高く、早く次の内容を知りたいとそれぞれ主体的に学習を進めていた。教室の座席を一人で学習をしている児童が近くなるように座らせた。

グループの友達とコースでは、普段から一緒にいる友達とグループになった児童もいたが、新たな考えを生み出すために、普段と違うグループを作る児童もいた。タブレットを使ってまとめる児童が多く、偉人の顔写真や中心となる出来事を理解するために、ロイロノートの共有ノート機能を使い、Xチャートにまとめていくグループもあった。

先生と一緒にコースでは、9人の児童同士で課題解決に取り組む時間を設定し、一方向型の授業ではなく、「いつでも先生が助けてくれる」というスタイルで授業を展開した。このコースでは、まとめに時間を要する児童や、学習定着に課題がある児童もいた。

教師作成のミニテストには、教師用指導書の「評価問題例」を活用した。学習内容を十分に理解できた児童は、自分のタイミングでミニテストに取り組み、間違えた問題については更に探究させることにした。

(ウ) 成果と課題

これまで複数の資料から読み取ったり、関連付けたりする学習に取り組んできたこともあり、児童間で「国際的地位をあげたのは条約改正できたからじゃないかな」「だって……」と三角ロジックに沿った発言も聞こえるようになってきた。特に効果が見られたグループは、「先生と一緒にコース」の児童である。普段の授業より生き生きとした表情で、積極的に発言し、ノートにまとめようとする姿を見ることが出来た。授業後のアンケートから、成果と課題が明らかになった。

7 成果と課題

(1) 成果：学習の取り組み方の変容

児童の学習の取組方法に変容が見られた。単元内自由進度学習の1時間目では、ノートとタブレットのどちらを使用してもいいと伝えたところ、クラスの1/3の児童はタブレットを使ってまとめた。

しかし、友達と議論したり、教科書を読んだりしながら学習を進めているうちに、ノートにまとめる児童が増えてきた。タブレットとノートの使いやすさについて児童に尋ねてみたところ、以下のような回答を得た。



【単元内自由進度学習(1時間目後)】



【単元内自由進度学習(3時間目後)】

【問い：タブレットとノート、それぞれどんな時に使いやすいですか？】

タブレットが使いやすいとき	ノートが使いやすいとき
☐ 見付けた情報を書き出すとき。 ☐ どんな関係があるか整理するとき。 ☐ みんなで一緒に書き出すとき。 ☐ 写真や図を入れたいとき。	☐ 学習したことを覚えようとするとき。 ☐ タイピングよりも書く方が早いとき。 ☐ 自学ノートにまとめるヒントにするとき。 ☐ 友達や先生の話から分かったことをすぐに書き入れたいとき。

児童なりにそれぞれのメリット・デメリットを理解し、自分の学習スタイルに合った方法を選択できているということが明らかになった。また、単元内自由進度学習を通して、自分に合った方法で、自分のペースで課題解決をしていくことで、主体的・対話的で深い学びの実現につながる事が明らかになった。

(2) 課題：進捗状況の見届け

今回は、振り返りシートではなく、時間内に作成した成果物を提出する形で進捗状況を把握した。先行実践では、学習を始める前に目標シートを作成し、学習が終わる度に学友の成果物を貼付していくという方法があると聞いていた。しかし、この時間を省くことで、児童が自ら学びを進める時間の確保が出来ることも事実である。従来の机間指導をしたり、電子黒板に常に学習のよう姿を提示したりすることで進捗状況を確認しながら本単元を進めることができた。しかし、更に研究を深める必要があると感じる。

8 おわりに

歴史の学習が中心となる6年生の学習で、児童が目輝かせながら真剣に議論したり、発言したりする社会科の授業実践が今年もできた。同時に、より学習効果を高めたいという教師自身の思いが強くなった。そして今年度は、ロイロノートの質問機能を随時使い、児童の意見を多く授業に取り入れることにした。すると、授業中に感じたことや疑問に思ったことを児童が休み時間に自分から質問に来ることが増えてきた。教師が「あなたの声が聞きたい」という姿勢でいること、児童も「自分の知りたい」「言いたい」を言える学習環境にすることが一番の授業改善につながると、今年度の実践を通して強く感じた。「主体的・対話的で深い学びを目指した社会科授業の実践」に向けて授業改善に努め、歴史にどっぶり！はまってしまう児童の育成を目指して更に自身の授業力向上に努めていきたい。